
月と貴方と願いの行方

愛羅0730

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月と貴方と願いの行方

【Nコード】

N8802T

【作者名】

愛羅0730

【あらすじ】

青い月が輝いた夜。

重なるはずのない世界と世界が重なり、出逢うはずのなかった私と貴方が出逢った。

私は忘れてはいけない罪と過去を背負い、貴方は重い責務と地位を背負っていた。

貴方の迎えが来るまでのほんの短い時間、私は、貴方を庇護するものであれば良かった。
なのに。

背負うものを忘れそうになるのはなぜ。
手を伸ばそうとしてしまうのはなぜ。

どうして、私たちは、出逢った・・・

はR15です。

ブログ Kiyoka-side (前書き)

初連載、見切り発車です。基本シリーズ・・・かも。タグをたがえないよう頑張ります。R15は保険です。

ブローグ Kiyoka-side

その夜、清佳は窓際に置いてある安楽椅子に座って、読書をしていった。

いつもは最後まで一気に読んでしまっただが、そのとき、なぜかふと窓の外が気になった。

集中力が途切れた清佳は、しおりを挟んでから立ちあがり、窓越しに外を見た。

いつもと変わらない、けれど一般家庭に比べると遥かに広い、我が家の庭。

私の家は、いわゆる旧家というやつで、長年出入りしている庭師が綺麗に整えている、「自慢」とも言える薔薇園はいまが盛りと、ほのかにライトアップされた中でも艶やかに眼下に広がっている。

（誰かに、呼ばれたような気がした・・・）

我が家は古いせいか、生まれて以来育った家でも、時々、闇が怖いようなときがある。

でも、いまはなぜか、切ないような、懐かしいような、愛おしい気持ちを感じた。

その感覚に、面影が蘇った。

（あれから、もう3年。もし、いま私を呼んだのが、あの人なら良かったのに。会いに来てくれたのなら、良かったのに。）

まぶたが熱くなって、慌てて空を見上げた。もう泣かないとあの日、決めたから。

だが、涙はすぐに乾いた。驚きと、少しの恐怖のために。

今日は珍しいくらいに、雲がない、綺麗な満月だったはず。

けれど・・・

いま見上げている月は、あり得ないことに、鮮やかに青く、輝いていた。

（怖い。怖いくらいに・・・なんて冷たい、青い、月。）

一瞬、月に囚われたかのような錯覚を覚え、無意識に自分で自分を護るように、腕を身体に巻きつけた。

次の瞬間。

身を貫くような、鋭い光線ひかりが走った。

どれほど、経っただろうか。

何も起こらないことに、恐る恐る、衝撃を受けたように伏せていた身を起し、窓を開けて、テラスに出てみる。

もう月は、見慣れた満月に戻っていた。

（あれは、いまのは、何だったの・・・）

戸惑いながらもほっと息をついて、目線を下に落としたとき、きらりと金が光った。

目を凝らすと、さきほどまで、誰もいなかったはずの薔薇園に、金の髪の人が倒れていた。

人が倒れている、とやっと頭が認識して、声を挙げた。

「誰か！誰か、来て！人が庭に倒れているのっ！」

ブローグ A l e c t o - s i d e (前書き)

戦闘シーン、残虐と思われるシーンがあります。苦手な方はまわれ
右！してください。

ブローグ Alec t o - s i d e

その日は、視察から戻る単調な馬車での旅路の一日で終わるはずだった。

兄弟としても臣下としても敬愛していた兄王が急死し、子も無かったため、そのとき王位継承権一位を所有していたアレクトに王位が転がり込み、即位してから早三年。

生国であるアストレア神国は他国に比べれば気候に恵まれており、平穏な国柄だったが、第二王子として生まれ育てられ、年がいつてからは軍属をしていたアレクトは、やはり文より武に得手があつた。

そのため、即位後の三年は国を治める者として学ぶことばかりで激動、とも言えた。

（あの頃は、いつかは將軍として、兄上をお助けするために剣を磨いていたのが、それが兄上が急死していまでは俺が「陛下」と呼ばれる……。王位には端から興味などなかったのに。）

王位に興味がなくとも、王族。王族として生まれた責務も責任も、わかりきっていた。また、王位が定まらず、国が乱れるのを疎むほどには、祖国を愛していた。

（それに・・・今際いまわの際に兄上と約束したからな。兄上の代わりに、意志を継ぎ、王位を継ぐと。この国を、民を、守ると。）

この3年で何とか王位にも慣れ、国も落ち着いてきたいま、城下を離れ、地方で行われていた治水工事の視察に赴くことは本来であれば避けたいことであった。

アストレア神国には中央を分かつようにあるセイン河が流れている。このセイン河は他国にも流れているため、貿易が盛んである。いまの季節を過ぎると、しばらくは雨季の季節となるため、ほころぎが発見された堤防の補強をしなくては災害を招く危険があり、ひいては国益へ影響を及ぼす。

しかし、川を有する国であるだけに、補強工事くらいは珍しくともなんともない。だからこそ、新港などの大々的な国をあげての工事ではないものに、本来は王であるアレクトが視察に来ることは平素でも滅多にない。

では、なぜ本来であれば行く必要のない視察を行うのか。

この視察を臣下から打診された際のやりとりを思い出し、アレクトはわずかに口角を上げた。

（全く、あいつらは……。ほかの重臣たちまで味方につけやがって・・・）

視察を打診してきたのは、父王の頃からの忠臣とその息子であり乳兄弟でもある二人の側近であった。

即位してから三年、ほぼ休みもなく執務にあたるアレクトに、さすがに健康が心配になったのだろう。

要約をすれば「工事の終りも終りに少し顔を出して、それ以外は五日ほど休養を取ってこい。」と進言されたのだ。

即断で却下したはずだが、二人の臣下はほかの並み居る重臣たちを説得して味方につけてしまい、あえなくアレクトが折れる形で視察は決定されてしまったのだ。

幸いにも、アレクトがほんの二週ほど城を離れても、火種になるようなことは今はない。また、臣下も優秀で執務が滞るようなこともないだろうと、そこはきちんと判断した上でアレクトは折れたのだ。

決定してから一月後、行き帰りともに地方領主などとの外交を幾分含めたため、また、季節も麗らかな春の季節であったため、魔力は使わず、アレクトは馬車で視察地に向け出立した。

即位するまでは軍属のため自分で馬を操っていたアレクトにとって、馬車などで冗談ではなかったが、それを差し引いてもこの時期の景色は観賞に値したため、思い直した。

行きの旅路は順調で、観光や外交を要所要所で行い、四日程かけ訪れた視察地は湯治場、療養地としても有名で、その地に視察で二日、休養で五日程過ごした後、来た道をたどった。

帰りの道中、不審な気配も感じられず、このまま行けば二昼夜で城下に戻るだろうと、その時は考えていた。

しかし。

その考えは、夜営のため天幕を張り、そろそろ休もうとした際に・
・沈黙とともに破られた。

突如、大きな魔力が顕現する気配を察知した。それとともに警備にあたっていた近衛兵への攻撃があったのだろう、衝撃が起こり怒号があがった。

粉塵が天幕にあたり、篝火が倒れ、天幕に燃え移る。

アレクトは素早く起き上がり、たとえ就寝時でも枕元に置いている

剣を取って天幕を出た。

そして目にしたのは、決して予想していなかった人物が、真っ赤な血と炎の中、佇んでいた。

その人物は。

「ユリウス・・・なぜ、お前がここに・・・」

襲撃者はアレクトと血を同じくした、ここにいるはずのない、決して城壁のなかの監獄から出ることはできないはずである弟のユリウスだった。

「何をわかりきったことを・・・決まっているだろう、貴様を含めここにいるものを全て殺し、王位を手に入れるためだ。」

頭では分かっていた「暗殺」という答え。だが、否定をしたい心はずかであった。

（俺は、王だ。迷いは、捨てろ。目の前のこいつは、王を弑しよう

とする反逆者だ。)

剣を正眼に構える。

「私は第三王子だっ！愚劣な民とは違った存在！この力は女神から賜った力っ！兄であるお前達でさえ持ちえなかった強大な力だっ！私こそ、王に！玉座にふさわしいっ！」

「・・・お前はその驕りのために、牢に入れられた。他人^{ひと}より強大な魔力に酔い、民を虐け、非道を働き、数々の命を奪った。王族だからこそ言語道断。極刑に処さなかったのは、俺の甘さ。今ここでその間違いを正す！」

叫びをあげ、斬りかかる。剣は魔をも斬る破邪であり聖でもある剣。ユリウスが創る魔力の楯も斬り破る。

一太刀、二太刀斬るほどに、ユリウスの攻撃力、体力を削いでいく。だが、魔力で創りだされる炎や風刃によりアレクトも傷を負う。

魔力と剣技が拮抗する。

決着の見えない争いに先に焦りが見えたのは、ユリウスだった。応戦により、強大であるはずの魔力が急速に尽き始めたのだ。魔力が尽きれば、剣を持たないユリウスには死が待っている。

「なぜだっなぜだ！なぜだっ！なぜ勝てないっ！くそ！くそ！くそっ！」

ユリウスは常軌を逸した様子で風刃を乱射する。今までより、桁違いの数、威力、殺傷力。

アレクトは深手を覚悟で最低限を剣で弾き、俊敏に走りこんで、ユリウスの懷を潜りこみ、身を貫いた。

「がっ！うう・・・がはっ」

剣を伝う血の感觸。吐き出され、噎せ返るほどの血の臭い。今更血濡れた両手に思うことはない。だが、慣れた行為のはずがいまは厭わしく感じられた。

ユリウスの身体から、剣を引き抜く。

崩れるように倒れたユリウスに近付き、息の根を止めるため、剣を振り上げた。

その時。

アレクトの身体を光が打ち抜いた。

倒れそうになる身体を剣を地に打ち立てることで何とか免れる。見ると腹部を何かが貫通したようで、大量の血に衣服が染め上がっていた。

「ふふ、はは、ははどうせ、死、ぬのなら、貴様も、道連、れ、にして、や、る。」

アレクトは身体に鞭打って、もう魔力のなく虫の息のユリウスに近付き、首に剣を突き刺した。

息も絶え絶えに、やっとの思いで身体を支えている状態で辺りを見渡すと、兵や侍女などが死屍累々としており、生きているものの気配はない。

篝火の炎はすでに木々にまで燃え移っている、ここを早く離れなければ、早晚火に飲まれるだろう。

そうわかっていながら、アレクトは動けなかった。何せ、腹に風穴が空いているのだ。立っているのが不思議なほど、出血しすぎていた。

大きな目眩がして身体を支えきれなくなり、地面に仰向けに倒れこんだ。

急速に薄れ行く意識の中、せいぜいという自分の呼吸音だけがなぜか耳に大きく響いた。

アレクトは必死に身を起こそうともがいたが、手を足をほんの少しでも動かすのが億劫だった。

（俺はこんなところで、死ねないっ！まだそのときじゃないっ！兄上との約束を果たすまでは、俺は、死ねないっ！）

血を吐きながら、アレクトは切願する。見上げる先は、雲一つ無い空に輝く、満月。国において、唯一と讃える月の女神。

（アストレア、月の女神よ！俺はこんなところで死ねないんだ！果たすべきことがあるんだ！どうか、アストレア！俺に、慈悲を！）

ごぶつと、口からまた血が吐き出たところで、アレクトは意識を失った。

そして。

月が、青く、輝いた。

ブログ A l e c t o - s i d e (後書き)

申し訳ありません。保険になりませんでした。がつつりR15です。このくらいはR15の範囲で収まりますよね・・・？ダメそうならお教えください！そして長い！やけに説明文！あわわわ、次からは大丈夫なハズ、です。

現 夢 か K i y o k a - s i d e

誰何するとともに、自室を飛び出し、二階から一階まで全力で駆け、庭を目指す。

あの男性^{ひと}を助ける、助けなくてはいけない。そう訴える心のままに。

薔薇園の中央、開けた場所にやはりテラスから見た金の髪の男性^{ひと}が倒れていた。

駆け寄ってみると、その男性^{ひと}は全身黒く染まっていた。恐らくは、流れ出た大量の血が乾いて固まったのだろう。

死んでいるのか。それとも生きているのか。

極度の緊張によるためか、心臓がきりきりと痛む。震える手を、その男性^{ひと}の口元に当てた。

微かに呼吸が感じられる。

（よ、良かった・・・生きてる・・・）

だが、衣服についた血や青白い顔を見るに、すぐに部屋に運ばなくてはいけない、いやそれよりも救急車を呼んですぐに医者に見せなくては・・・。

非現実的な現実混乱する私の後ろから、人が駆けてくる気配がした。

「清佳様っ！」

就寝中か就寝するところだったのだろう。寝衣のまま駆けてくる中肉上背の男の姿に、思わず叫んだ。

「川原、この男性^{ひと}大量に出血しているみたいなのっ！お願い、診て！」

駆けよってきたのは、時代が移り変わっているにも関わらず、変わらず代々我が家に仕え、家宰や秘書を務めている川原だった。

川原は昔、必要に迫られて医学を学んだことがある人間だ。ここは川原に任せた方がいい。

川原は私の背後の男性^{ひと}に気づき、慎重に診始めた。

私は救急車を呼ばうと、屋敷に戻ろうとしたが。

「・・・清佳様、とりあえず救急車の必要はありません。呼ぶ必要があるのは警察です。」

その川原の言葉に、慌てて振り向く。

「救急車が必要ないって・・・なぜ・・・警察・・・？」

「ええ。この男性は服にこそ血が大量についていますが、外傷が見当たりません。見るにコスプレかと思うような服の腹部に大きな穴が開いてはありますが、肌に傷一つない。ただ、そうなるとこの出血は大変おかしい。この者の血ではないなら、誰かほかのものとなる。つまり犯罪の可能性が高いうえ、屋敷にも不法侵入している不審人物です。ですから、この者が目を覚ます前に、警察を呼びます。」

ちら、と男性を見やると、どうやら外国人のようだ。

確かにコスプレのような格好をしている。まるで中世ヨーロッパの貴族・・・いや王族を思わせる、きつと血や破れがなければ見事だろうというような金と銀と見てとれる糸で、繊細な美しい刺繍がされた衣服を身にまといていた。

一瞬、自失していたらしい。

用意周到に持ってきていたのであろう。気が付くと、川原は手に携帯を持って110番に掛けていた。

私ははつとして、その携帯を奪い取り、通話を切った。

「清佳様っ！それを早く返してくださいっ！貴女は自分がなにをやっているのかわかっているのですかっ！」

「川、原・・・ちがうわ・・・」

ちがう。

ちがう。

この男性ひとはそんなひとではない。

第六感、天啓とも言えるような、絶対的なナニか。何度経験しても自分が、自分でなくなるような、圧倒的な存在の意志。

突き動かされ、決断する。

この男性^{ひと}を。

護る。

「川原、当主^{ひと}として言うわ。この男性^{ひと}は当家で保護する。責任は、当主である私が持つ。まだ、この男性^{ひと}が犯罪者だとは決まっていな^いい。なにか事情があるのかもしれない。とにかく、この男性^{ひと}を部屋に運んで。朝になってこの男性^{ひと}が目を覚めたら、話を聞いて、その結果この男性^{ひと}が犯罪者ならその時警察を呼べばいいわ。」

「ですが清佳様っ・・・」

我ながら、常人が聞けば、筋が通らない、子供のような駄々だということはわかっている。

川原のいうとおり、警察に通報するのが正しくて、私もナニもなければ酔狂なまねはしない。

だが。

激しく反論する川原を見やり宣言する。

川原の言いたいことはよくわかっている。それでも。

この勘に逆らうてはいけないことは、身に染みて、わかっていた。

「これは当主命令よ。私はこの男性を庇護します。・・・私の勘が、この男性は犯罪者ではないと、それよりか、私達で庇護しなくてはいけない存在だと訴えているの。」

「ねえ、川原。この家に仕えるものでありながら、私の勘が信じられない？」

じつと険しい顔で見つめてくる川原の目を見つめ返す。

私の言っていることが、ありのままの真実だと、理解できたのであろう。

表情は締まっているが、先ほどのまでの険を潜め、うなずいた。

「畏まりました。清佳様。」

現か 夢か K i y o k a - s i d e (後書き)

キャラが暴走するってあるんですね・・・。自分で書いていて「え？清佳ってこんな設定だったわけ？」って激しく疑問。

現か 夢か A l e c t o - s i d e (前書き)

なんとか9日中に間に合いました・・・

現か 夢か Alecko-side

後宮内の「王妃の庭」と呼ばれる庭園で、父と母がお茶を飲みつつ談笑している。

母の傍らには小さな揺り籠がある。きつとまだ生まれて間もない、幼い弟が寝ているのだろう。

その少し離れたところでは、王太子として勉学に明けくれ、最近では姿を見かけることも少なくなってきた兄が、木刀を振っていた。

アレクトが子供の頃は、それが当たり前な光景だった。

他国の王族や以前の自国の王族と比べ、アレクトの両親は極めて仲睦まじく、兄弟仲も皆良かった。

国一番の剣の腕を持ち、王としても賢王と名高い父。高い教養を備えた王妃、良妻賢母と謳われる母。

父の跡を継ぐ者として、頭角を現した才気溢れる兄。国でも持つ者が数少ない、魔力を持って生まれた弟。

幼いアレクトはそんな家族を誇りに思い、父や兄を目標に、毎日鍛錬に励んだ。

第二王子として、窮屈な思いや重圧を感じなかったとは言えない。それでも。温かな、信頼できる家族がいて、幸せだったのだ。

（ああ・・・これは・・・夢だ・・・）

だからこそ。

どこで道を間違えたのか。

アレクトが13歳で母は産褥死し、赤子・妹であつたらしい・も息をすることはなかった。

母が亡くなった際、深い悲しみのため、アレクトは内外に対して第二王子としての体面を取り繕うことだけで精一杯だった。

その時は自分のことのみで気付けなかったが、今思えば、ユリウスには不憫な思いをさせたと悔やむ。

魔力が大きければ大きいほど、器である身体に負担がかかる。子供ならなおさらのことで、大きな魔力を持ったユリウスは大変病弱な子供で、ほかに比べて発達も遅かった。

だからこそ、母が亡くなった際、9歳であつたユリウスには、まだまだ母が必要だったはずだ。

その証拠に、母が亡くなってから、情緒不安定がひどくなり、言動が前にも増して幼くなったユリウスは、感情のままに魔力を暴発させることが多くなった。

そして、母が亡くなった翌年。10歳にしてユリウスは一時的に神殿に預けられることとなった。

一度魔力を暴発させれば、ユリウスは制御できず、生命をやつと保てる限界ぎりぎりまで放出してしまう。

このままでは、体力が尽きるのが早い、魔力が尽きるのが早い、どちらにせよ早晩ユリウスは命を落とす。

それを避けるためにも、父が決断したのだ。

聖域である神殿内であれば、月の女神アストレアの加護がある。

満月は癒しの力、三日月は邪気を祓う力。

神殿であれば、ユリウスが暴発しても命を落とす危険性はないに等しい上、神官から魔力の制御方法を学べる。

苦渋の選択だったのだ。

だが。

この選択は本当に正しかったのだろうか？

神殿に入ってから、ユリウスは年に数えるほどしか城に戻ってこなかった。それも、王族が一堂にかいさなくていけないような式典のみで、アレクトとユリウスがゆっくり腰を据えて話すような暇はなかった。

年が経ち。アレクトはユリウスの姿を見かけるたびに、暗く青白さが増していく顔色や、折れそうなほど線の細い身体にさすがに心配になった。

悩み事や、心配ごとがあるのかもしれない。

折を見て話す機会を持つとを決意した矢先、父王が身罷り、兄が23歳という若さで即位した。

20歳だったアレクトも王弟として軍務に政務にと尽力しなくてはならなくなり、ユリウスのことはいったん保留となった。

（俺たちは兄弟だ。これからいくらかでも話す機会はある。いまは国が優先だ。）

そして。

ユリウスと兄弟として話し合う、恐らくは最後の機会を、アレクトは、永遠に失った。

兄王が即位してから忙殺されていた日々が落ち着くまでに四年。

その時には、既に手遅れであった。

徐々に聞こえ始めた、ユリウスに関する不穏な噂。

いわく。ユリウスは田舎街の女子供を連れ去り、後日、連れ去られた者が明らかに魔力を使って殺された姿で発見された。

いわく。ユリウスが立ち寄る先々で問題を起こし、金銭を踏み倒す、脅す、拳句の果てには魔力を使って暴れまわり、死傷者を出した。いわく。貧民街で、人相の悪い輩たちと額を寄せ合って悪事を企んでいる。あまつさえ、「兄二人の息の根を止める」という言葉が漏れ聞こえた。

などなど。

数え上げれば切りがないほどの、噂。

アレクトは初めの頃、眉をひそめて一蹴していた。「そんなはずはない！」と。

だが、噂は日増しに大きくなり、真偽を確かめるため調査にのり出すまでになった。

アレクトはこのときまで、王族に対し、不敬な噂を流した輩を明らかにして捕えさせようと考えていた。ユリウスに関する噂が真実だと信じていなかった。信じたくなかった。

だが、明らかになった結果に愕然とする。

調査報告には、噂のほとんどが、『真実』であると、記されていた。

その報告と、証拠をもってすぐさまユリウスとユリウスに加担した者は全て捕縛された。ユリウスは身の危険を察知して、亡命寸前であった。

ユリウス以外は、王家に対する反逆罪が認められ、公開処刑となった。

ユリウスは王族であるため、また、後日判明した事情により情状酌量という名の温情が与えられ、処刑は免れた。

しかし、魔力を無効化する拘束具を嵌められ、一生涯を監獄で終えることが決定された。

その時、ユリウスは20歳。単純に計算しても、平均寿命まで、25年程幽閉されるのだ。

監獄に収容される日。兵に引き立てられて歩くユリウスの姿に、無理を言っただけで強行に立ち会ったアレクトは唇を噛み締めた。

（一言。たった一言でも良かったのだ！間に合ううちに、声が届くうちに、手を差し伸べていれば！こうなる前に、ユリウスを、助けられた！）

どんなに嘆いても、時間は巻き戻せない。あの頃には戻れない。まして、失った命が蘇ることはない。傷ついた心が癒えることはない。

国民の、この一件で損なった王族に対する信頼や敬意が簡単に戻ることもない。

わかっている。

アレクトがどんなに己を責めようと、誰が、何が悪いではなく、ユリウスが犯した罪は、純然としてユリウスの罪なのだ。

頭では理解していても、涙が流れた。

頬に幾筋も涙が伝う。

それでも、アレクトは夢のなかから抜け出せないでいた。

枯れぬことない涙。

どのくらいの時間、泣いていたのだろうか。

アレクトはふと、幼いころ母に頭を撫でられたように、温かな手のぬくもりを感じた。

夢の中で、笑い声が響く。

幸せだと、まだ何も不安に思うこともなく、素直に思えた日々。もう、戻ることはない、大切な家族。

・・・いつまでも、こうして、『夢』を見ていたかった。

アレクトの頬に、最後の一滴が光った。

現か 夢か A l e c t o - s i d e (後書き)

アレクトサイドを書く、なぜか説明文……。ほんと、なぜだ・・。

目覚めと戸惑い K i y o k a - s i d e

川原が指示通り男性を背負って、一階の客室まで運んでくれた。

川原は上背はある。しかし、男性も同じくらいあり、またよく鍛えているようでかなり重い。

最後にはぜいぜい言いながら、なんとか川原は男性をベットに横たえ、ぐったりしていた。

そんな様子に清佳は申し訳なく思い、男性の世話は私がする、と言ったが、川原は頑として譲らなかった。

しばらく揉めたが、仕様がないので、折衷案として今夜は二人して客室に泊まり込み、二時間交代でということになった。

初めは清佳が面倒をみると強行に言ったため、いまは川原はソファで仮眠を取っている。

この屋敷に、清佳と川原以外で年配女性の仕様が2人住んでいる。川原が眠りたいま、しんと静まり返り、男性二人の寝息が時々聞こえるだけだ。

どうやら川原以外の仕様人は、先程の騒ぎにも起きなかったらしい。ちらりと時計を見ると、夜中の2時を指していた。この時間では仕方がない。それに、逆に起きてくれなくて良かったとさえ思った。もし、二人が目覚めていたら、もっと自体はややこしくなっていただろう。

暇を持て余した清佳は、男性の枕元に椅子を持ってきて座り、男性をぼんやりと見ていた。

庭園で倒れている男性を見たとき、月明かりで見た男性は外国人だということしかはつきりとはわからなかった。だが、いま目の前で眠る、スタンドの光にほのかに照らされた男性は、とても美しかった……。

（なんでこんなにまつげが長いの……。それに鼻筋もすつと通っていて、唇も形が整っているし……。肌も、私以上に綺麗じゃないかしら……。白くて透明感があって、にきびもそばかすも一つもない……。羨ましい……。）

女性として悔しくなって、清佳はあと溜息をつく。だが、目の前の男性の、彫像のように美しい顔からなぜか目が離せなかった。

どれくらい、男性の顔をみつめていただろうか。ふと男性が眉を寄せ、苦しそうに喘ぎ始めた。目尻からは幾筋も涙が伝う。

（悪い、夢に、うなされているのかしら……。）

起こした方が良かったが、忍びなかった清佳は無意識に、男性

の髪を撫で、梳き始めた。

ここに貴方を傷つける者はいない。
だから安心して眠って。

そんな想いが届いたのか、男性は徐々に落ち着いていき、目尻から最後の涙が流れたとき。

男性の目が開き、現れたblueと清佳の視線が絡まった。

「あ、あの、おはようございます・・・?」

相手は外国人だ。英語の方が良かったかもしれないが、清佳は英語はあまり上手くない。ここは日本だ、と開き直って日本で話しかけてみる。

男性の焦点が、清佳に合う。睨むような視線に、一瞬清佳はたじろぐ。

「……ここはどこだ。」

どうやら、相手は日本語が話せるらしい。内心ほっとしつつ名を告げた。

「私は、西園寺家当主清佳と申します。ここは西園寺家の屋敷です。失礼ですが、貴方のお名前をいただいてもよろしいですか。」

「……我はアレクト・デイン・アストレア。我を介抱いただいたことは、感謝する。」

「い、いえ、とんでもない。当たり前のことでしたまでです。」

（いま、「我」って聞こえたような気がしたけど、気のせい、よね……？外国人だから一人称間違えている、とか……？でも、かなり流暢だし……。）

アレクトは清佳の反応に、なぜかさらに、険しい表情になった。

「さいおんじ……と申したか。そなた、アストレアと聞いて気づかぬのか？」

「アストレア？いいえ、あの、何を言っているのか全く。アストレア、というのは人名ですよ・・・ね・・・？何か意味があるのですか？」

「正式にはアストレア神国という国名だ。・・・限られた者だけが名乗れる名でもあるが。」

そう言ったきり、男性・アレクトは黙ってしまう。

（国名でもあるし、名でもある？・・・それってもしかして、王族とか？）

そう清佳が問おうとして、一足先にアレクトが口を開いた。

「・・・女人が当主と名乗っていることと言い、アストレアを知らぬことと言い、この国は我が国ではないようだが、この国の名は何という？」

（この男性、観光客ではないのかしら・・・？出身国ではないことは当たり前にかつているはずなのに、なぜ・・・？）

「日本、ですが。ちなみのここは、日本の首都東京の田園麻布という地域です。」

「日本？東京？・・・聞いたことがない国名だ。そなたが嘘を申しているわけでもないようだが・・・。」

いまの言葉は、心の底から、聞き間違えだと思いたい。

「・・・あの、日本を知らないという方が私にはおかしいのですが。日本は経済大国ですし、一応列強にも入っていますし。その、私が不勉強でしたら大変申し訳ないのですが、アストレア神国という国名は聞いたことがありません。」

「・・・この家に、世界地図はないか。」

（確かに、押し問答しているより、地図で確認した方が早い。私の部屋にあったはずだし。）

「あります。いま、持ってきます。」

アクトレアが、頷くのを確認し、清佳は急いで自室にある世界地図を取りに走った。

何か、これから恐ろしいような、不可思議なことが起きるような嫌な予感を抱きながら・・・。

目覚めと戸惑い K i y o k a - s i d e (後書き)

アレクトの一人称は、王の時は「我」、プライベートでは「俺」です。

目覚めと戸惑い A l e c t - s i d e (前書き)

お気に入り登録をしていただいている奇特な方々！大変ありがとうございます。
ございます。本当に稚拙な文章ですが、楽しんでいただけるよう
結末でがんばります。

目覚めと戸惑い Alect-side

目を見開くと、心もとない明りのなか、女人が顔を覗いていた。

「あ、あの、おはようございます・・・？」

アレクトが目を覚ましたことに気づき、幾分困惑気味に、呼びかけられる。

多少霞むような感じのする目に力を入れ、アレクトはもう一度女性に目をやった。

明りは少ないが年格好や声からして相手は20代中頃のように見える。

（この者・・・黒の髪、黒の瞳とは・・・移民、か？いや、それとも俺は近隣諸国のどちらかにでも連れ去られたのか・・・？だが、それにしては処遇が良い・・・。）

アレクトが懸念のため、無意識に目元を険しくしていたのだらう、女人が一瞬たじろいだ気配がした。

（ともかく、今は情報が必要だ。）

感覚から、この女人に殺気や敵意、害意は感じられない。味方、とは言えなくともどうやら敵方ではないとあたりをつけ、口を開いた。

「・・・ここはどこだ。」

アレクトはそう問うと、なぜか女人がほっと安堵した。

（・・・？）

「私は、西園寺家当主清佳と申します。ここは西園寺家の屋敷です。失礼ですが、貴方のお名前をいただいてもよろしいですか。」

（さいおんじ・・・。我が国や近隣諸国でも聞かぬ名だな。当主と名乗ったことや室内の誂え、物腰を見るに、どうやら貴族のようだが、女人が跡を継いだなどとは聞いたことがない。）

「・・・我はアレクト・ディーン・アストレア。我を介抱いただいたことは、感謝する。」

「い、いえ、とんでもない。当たり前のことでしたまでです。」

女人―清佳―のその言葉や対応に、アレクト険しい表情になる。

（名に国名であるアストレアを戴く者は、王族。それは大陸中のどの国でも変わらぬと、子供でさえ知っていること。仮にも当主を名乗る者が知らないのか？）

「さいおんじ・・・と申したか。そなた、アストレアと聞いて気づかぬのか？」

「アストレア？いいえ、あの、何を言っているのか全く。アストレア、というのは人名ですよ・・・ね・・・？何か意味があるのですか？」

「正式にはアストレア新国という国名だ。・・・限られた者だけが名乗れる名でもあるが。」

そう言ったきり、アレクトは黙る。

（ユリウスに結託していた者が諸外国のどこかの国に連れ去ったかとも思ったが、どうやら違うようだな・・・。）

「・・・女人が当主と名乗っていることと言い、アストレアの名を知らぬことと言い、この国は我が国ではないようだ、この国の名は何という？」

「日本、ですが。ちなみのこは、日本の首都東京の田園麻布という地域です。」

「日本？東京？・・・聞いたことがない国名だ。そなたが嘘を申しているわけでもないようだ、が・・・。」

アレクトは王族として、またいまでは王として、大陸にある諸外国の歴史や言語、文化を学んできた身である。その経験からしても、「日本」という国名は聞いたことがなかった。

また、軍に在籍に、ときに罪人の聴取にあたった経験から清佳が嘘を話していないこともすぐにわかった。

「・・・あの、日本を知らないという方が私にはおかしいのですが、日本は経済大国ですし、一応列強にも入っていますし。その、私が不勉強でしたら大変申し訳ないのですが、アストレア神国という国名は聞いたことがありません。」

（これ以上、話をしていても埒があかないな・・・。まず王城以外にあるとは思えないが、地図さえあればこの状況も把握できるはず・・・。）

地図、それも世界地図など、本来であれば王城の奥深くに秘されるものだ。正確な地図は戦時には戦力になるが、敵方に渡れば致命傷になる代物だからだ。

だが、なぜかアレクトはこの屋敷にはあるような気がしたのだ。

「・・・この家に、世界地図はないか。」

「あります。いま、持ってきます。」

ないはずだ、という期待を物の見事に裏切って、清佳が何でもないように肯定した。

アレクトは思わず、脱力しそうになるのを抑え、緩慢に頷くことで清佳に返した。

清佳が部屋を出て、走り去って行く音が徐々に小さくなる。

その音を耳が勝手に拾いながら、アレクトにはおぼろげながらに予感があった。

——『ここ』がアストレア神国を有する大陸の「どこか」ではないことを。

（月の女神、アストレアよ。貴女は何を望んで俺を『ここ』に導いた・・・？）

目覚めと戸惑い Alect-side (後書き)

やっとアレクトと清佳が追い付きました。これからはかつ飛ばしていききたいと思います。また、LOVEにも発展させていきたい・・・！基本シリ阿斯調で堅い文章ではありますが、ハピエン主義ですのでご安心ください(*^ー^*)

現状把握 1 Kiyoka-side (前書き)

やっと書きあげました。1話分のつもりで書いたものが長かったため、2話に分けました。そのため、分量少なめです。

現状把握 1 K i y o k a - s i d e

自室にある地図と、思い浮かぶことがあつて代々当主に伝わる書物のうち、目当ての本を1冊引つ摺むように取り、1階のアレクト達がいる客室に戻る。

今話した以上の内容を話すのであれば、家宰であり秘書の川原も同席した方がきちんと内容を把握できるうえ、今後の対応もスムーズだ。

清佳はそう判断して、ソファで未だ眠る川原を起こし、3人は改めて客室にある応接用のテーブルの席に着いた。

口火を切ったのは清佳だった。

「改めて、私は西園寺清佳と申します。清佳、と呼んでいただいて構いません。この者は西園寺家の家宰であり、私の秘書でもある川原と申します。今後の対応のためにも、川原を同席させます。」

「川原と申します。」

「ああ。我はアレクト・ディーン・アストレアだ。」

アレクトはどつしりとソファに構えてはおり、威風堂々としている。今は来客用のシルクの純白の寝巻にガウンを羽織っているが、そんな姿でも、威厳や気品があり、初めに見た服装から推察した以上に、きちんと教育のされた上流階級出であることがわかる。

（どんなに目が悪くても、明りの下のこの人を犯罪者と言えるひとはいいわよね。）

西園寺家の客間は一流の調度品で揃えられており、その中に違和感なく座るアレクトはさながら物語に出てくる貴公子のようだった。

アレクトのそんな姿を見れば、普通の女性なら頬を染めてうつとり見つめるであろうが、清香にとってはある疑惑が深まった様子でしかなかった。

（・・・やっぱり先にこのひとの身分について、はっきりさせないと話を進められそうにないわ・・・）

「あの、アレクトさんはアストレア神国という国からいらした・・・

ということでもよろしいのですよね？」

「ああ。」

清香の予想が正しければ、アストレアは「様」付けされて呼ばれるのが常だったはず。

だからこそ、清佳が「さん」付けで呼ぶことに対して何か言われるかと思っただが、アストレアの表情は変わらない。

どうやら気にしていないか、していてもお咎めなしらしい。

「率直に聞きますが、アレクトさんは、国名を名としているということは、もしかして王族とかですか。」

「ああ。我はアストレア神国86代目国王だ。」

あっさり、といった口調で返されて、清佳は己の予想以上の答えに溜息をつきたくなる。

右隣に座る川原の表情がちらりと視界に入ったが、同じく驚いているようだった。

（ああ……。想定した中で一番最悪なパターンに近づきつつあるわ……。それに以上に、まさかこのひと国王だなんて……。悪くて王子止りだと思っていたのに……。）

これ以上不吉な予想が当たりませんように、と叶いそうもない願いを清佳は心の中で呟く。

「……もし、私の予想が正しければ、アレクトさんの国はこの世界地図に載っていないかと思っています。」

「清佳様……。一体それはどう言った理由で……？」

「アレクトさん、これを見てください。」

清佳は川原の問いに答えず、まだ開いていなかった地図をテーブルに広げた。

地図を陰しい表情で見やったアレクトは、すぐに細く溜息をついた。

「確かに、この世界地図には載っていない。そもそも大陸の形からして違う。それに、我が国を含め、大陸中の諸国を探してもこれほど精密な地図を作る技術はどの国も持っておらん。」

当たって欲しくない予想ほど当たるもの。
皮肉にも、清佳の予想は見事的中、らしい。

「と、なると、アストレア神国は『異世界』の国、アレクトさんは『異世界人』、ということになるかと考えられます。」

現状把握 1 Kiyoka-side (後書き)

らぶはまだか・・・！

現状把握 1 A l e c t - s i d e

神の真意。

そんなものは人には推し量ることなどではしない。
それでも、アレクトは認められずに空を睨んでいた。

と、かすかに人の足音が近づいてくるのが聞こえて、自嘲した。

（なぜ、を考えてもわからないのであれば到しかたない。俺にできることは一刻でも早く国に戻ることだ。）

清佳が手に大きな紙を畳んだ状態のものと本を1冊持って戻ってきた。

そして、少し考えた後、おもむろにソファに近づき、その場に寝ている者を起こした。

清佳ともう一人に促され、アレクトは寝台を離れ、応接用と思われる卓に着いた。

口火を切ったのは清佳だった。
三者で簡単な自己紹介をする。

物腰や当主である清佳の態度からそうだろうと予想していたが、ソファで寝ていたのは家宰であつた。
アレクトは「秘書」という言葉は慣れなかったが、家宰と同義語であろうと話の腰を折ることは控えた。

「あの、アレクトさんはアストレア神国という国からいらした・・・ということでもよろしいのですよね？」

「ああ。」

（やはり、この者は「アストレア神国」という国を知らぬのだな。ただ無知なだけか。・・・いや、大陸の者であれば「アストレア神国」を知らぬはずがない。ということは、嘘を言っていない様子からしても、ここは「アストレア神国」という国がない、おそらくは別の世界、と考えた方が良さそうだ。）

そんなことを内心考え、アレクトは早い段階にこの世界が、自国のある世界ではないと悟つた。

アストレア神国は年々魔力を持つ者の出生率が下がっているとはいえ、女神を戴く国。他国に比べれば、未だ魔力を持つ者は多い。
それに、膨大な魔力によって、異なる世界に移転する術が存在すれば、大陸には成功して異界の技術を持ち帰ったものが大昔にはいた

のだ。

それから考えれば、アストレアの力により、界を渡ったのだと結論づければ納得がいく・・・というより納得せざるを得ない。

なぜなら。

目につく調度品の作りは全く見たこともないものだ。

また、そこかしこに銀色の鉄らしき金属がつかわれているものも多
くある。

何より決定的なのは、明りだ。

夜、自国であれば火を焚くか、蠟を燃やすしか明りを取る術はない。
だが、この部屋はまるで昼日中のように明るいのだ。

その源が、天井に備え付けられている傘のなかの円筒状のもので、
もちろん自国どころか大陸中探しても見つかることはない。

それ以外にも、四角く金属で作られた薄い箱らしく物など、（後日、
それらが「蛍光灯」と「テレビ」というものだと知る。）それら全
てが、ここがアストレア神国を有する大陸の何倍、何十倍も進んだ
文明なのだと、見ただけで表していた。

ここまで考えついて、アレクトは「様」を付けられずに呼ばれるこ
とは初めてだったが、黙認することにした。

まだアレクトが王だとは知られていない上、王だと知られていても、
この世界ではなんら意味はない。

それに、こうも文明が違うのであれば、制度や信仰や生活など全て
が、アレクトのものとは180度違う可能性が大いにあるのだ。

（郷に入っては郷に従え。まずは静観して、状況を理解しないこと
には何も言えん。）

「率直に聞きますが、アレクトさんは、国名を名としているということ、もしかして王族とかですか。」

そう清佳に問い掛けられ、アレクトは頭を切り替えて気づかれぬよう目の前に座る二人の人物の観察をした。

アレクトは王だ。

王は一見強力で華やかで、この世の栄華を極めているように思われる。確かにそう言った一面はあるが、それ以上に権力や争い、思惑、様々な醜い負の感情が付きまとう。

平穏な国柄であるアストレア神国にしても、やはりそれは他国に比べても変わりがなかった。

中でも王となった三年の中で一番神経をすり減らしたのは、貴族の扱いであった。

弱みを見せれば付け込まれる。

信用しすぎれば偏りが出てどこかに角が立つ。

ひとつの見極めや加減を間違えれば身の危険につながることもあるのだ。

いま、アレクトは武装もしていない、潔いほど身一つの状態だ。

生きて国に帰るためにも、まずは相手が敵か中立か味方か、正確に見極める必要が平素とは比べられないほど求められる。

清佳への第一印象として「信用できそうだ。」と思っただが、相手はアレクトの国を知らない、それどころか、違う世界の者である可能性が高いのだ。

口ぶりから、疑問ではなく確認のために「王族か」と問うてきた理

由はわからないが、アレクトにとって「諾」と答えるのは、状況を打開する大きな賭けであった。

「ああ。我はアストレア神国86代目国王だ。」

（さあ、どんな反応をする。）

嘘を言うなと嘲笑し、見下して切り捨てようとするか。

わずかな真実の可能性を拾って、媚びへつらい見返りを求めようとするか。

それとも――。

そんな思いでアレクトは王だと明かしたが、目の前の二人は純粹に驚いているだけのようだった。

いや、清佳がわずかに顔をしかめたのを、アレクトは見逃さなかった。

（予想を裏切り、あまつさえ顔をしかめるとは。）

当主だ、と名乗った清佳を、アレクトは正直に言えばそう認識していなかった。

侮ったわけではないが、華奢な儂い印象の受ける清佳に対して、自然と「女性」として接しており、「当主」として接していなかった感否めない。

だが、そのわずかな表情の動きに、なかなか強かな、思った以上に「当主」なのかもしれないと認識を改めた。
そして、その認識は間違っていないことはすぐにわかる。

清佳は、アストレア神国は地図に載っていないだろうと、ほぼ確信しているような口調で話したのだ。

確かに、見せられた地図は自国のものとは比べ物にならないほど精密なもの。大陸の形も全く非なるもの。

アレクトのなかでそれはほぼ確信していたことだったので、大した驚きはなかった。

だが、一つだけ、大きな猜疑がある。

「と、なると、アストレア神国は『異世界』の国、アレクトさんは『異世界人』、ということになるかと考えられます。」

（どうやら、賭けの勝敗は未だつかず、のようだな。）

そう思って、アレクトは皮肉に上がりそうになる口角を自制する。

（なぜ、キヨカは、俺の世界とこの世界が違うものだということが「真実」であると断定して話しているのだ・・・？）

現状把握2 Kiyoka-side

「・・・ほう。そなた、我の話を全て信じると？その上で『異世界』と結論づけると？」

「ええ。」

「その根拠は？」

「・・・。長い話になりますが、構いませんか？」

「構わん。」

川原は雰囲気で清香の話の内容を察知したのだろう、「本当に話されるのですか？」と言いたげに清香を見てくるが、清佳は視線で制した。

「・・・西園寺家は、史実や家系図によると今年でちょうど1,000年の歴史を数える古い血筋です。その起源と思われる初代は『異能』を持った女性であつたと、代々伝わっております。その「異能」は直系の女子にのみ遺伝され、西園寺家はその「異能」を用いて数代前まで政界や経済界などの裏社会で活躍しました。今は至極健全ですが、そうして西園寺家は家格を存続させてきました。」

急に飛んだ話に水を入れることなく、アレクトは興味深げに清佳の話聞いています。

「ほう。それでその『異能』とやらわ、どんな力なのだ。直系の女子のみ、ということはそなたも異能を持っているのであろう？」

「・・・昔は『遠見』——未来を予知する力だったようですが、時代の流れによつて血が薄くなったためか、私の能力は、未来に起こる事象などを一方的に見せられる『託宣』のような力です。わかりやすく私は「勘」と言っていますが。」

「『託宣』か。」

「ここで話はつながるのですが、アレクトさんを庭で見つけた際、川原が貴方は犯罪者の可能性が高いうえ、屋敷に不法侵入している不審人物だから、警察、兵士と警邏を兼ねるような機関を呼ぶと主張しました。その時に託宣があつたんです。

『この男性ひとはそんなひとではない。とても貴い方。護らなければならぬ方。』と。

『託宣』を違えることは西園寺家では最大の禁忌。違えてしまえば能力者や西園寺家に災厄が降りかかります。それを避けるため、という理由も含んだ根拠が1つ。もう1つの根拠はアレクトさん、「ゼストリア国」か「アウス・フォード」という名はご存知ですか？」

「ああ。ゼストリア国は大陸の西端に位置する国であるし、アウス・フォードと言えば今は「立法の父」と呼ばれる、大魔力使い。大陸各国の法体系を形作る礎を築いた人物だ。だが、500年も前の人物だぞ？」

その言葉に、清佳は地図と一緒に持つてきて、テーブルの脇に置いていた当主に伝わる書物のうちの1冊のある部分をアレクトに示す。

「やっぱり。これを見てください。アウス・フォードさんは、唯一の前例なんです。西園寺家はその能力からか、摩訶不思議な逸話が代々伝わっているんです。これもその一つで、アウスさんは500年前に異界から来て、西園寺家の庇護の下で半年の日を過ごしたのち、異界に帰った、とあります。さすがに異世界人は初めてだったようで、当時の様子が事細かに書かれていて、ここに、アウスさんの世界にはアストレアという月の女神がいる、と言っていたと記述があります。地図を取りに行く時、よくよく考えてみると、『アストレア』にひっかかるものを感じまして。もしかして、と思い当たって持ってきたんです。」

「・・・この話は、逸話としてこちらの史実にも残っている。アウスはまだ若い頃、その多大な才の限りに研究し、ついに異界移転法を生み出した、と。そしてそれをを用いて異界に旅立ち、六月経たのち戻って異界で学んだ法を基にゼストリア国の法を整備したとも。それに。我が国は月の女神アストレアを唯一神として奉じているからこそ、国名にアストレアを戴いている。」

「この片方は仮定ではありませんでしたが根拠があつたからこそ、私はアレクトさんを匿って介抱しました。今の話で仮定が正しいことも証明されましたし、今後のことについて、西園寺家でアレクトさんの一切はお任せください。」

長い話を終え、清佳はふうと溜息をつく。

（やっぱりすごく緊張していたのかも。肩が固まっていたのか痛い
わ。・・・まさか家に伝わる、荒唐無稽な話が真実で、今現実と同
じようなことが私の目の前で起こっているなんて・・・。小説みた
いだわ。）

「・・・あい、わかった。この国というか世界が『異世界』という
のは、キヨカ殿の話や地図、この室の謎えなどを見るに真実なのだ
ろう。その上で、我をこの家にて庇護するというのも、大変ありが
たい。」

そう言って、アレクトは頭を下げる。

その様子に、清佳も川原も目を見開いて驚く。

（アレクトさんって、王、だよな・・・？そんなひとに頭、下げら
れるなんて・・・。）

2人の驚きの様子が伝わったのだろう。
アレクトが苦笑して言った。

「王とはいえ、この世界ではそれも意味のないものであろう。ましてや、そなた達は恩人だ。人として頭を下げるべきであろう?」

(アレクトさん・・・苦笑とは言え、初めて笑った・・・。このひと、見かけは物語の貴公子! っと感じなのに、鍛えているみたいでガタイ良いし、仕草というか雰囲気は武骨というか、軍人? みたいだわ。)

「それと、今の話から推測すると、「500年前に半年間」という内容から、こちらとあちらの時間の流れは同じだと考えられる。それであれば、迎えが来られる可能性が高い。」

「迎え・・・ですか?」

「ああ。異界を渡ることは本来なら出来ん。だが、我と私の乳兄弟のウィルソンであれば出来る。というより我とウィルにしかできん。」

「あの、それはどういう・・・？」

「まず、アウスの異界移転法は莫大な魔力が必要になるため使えんとなると、我が国独特の術式のひとつである、満月の日にしか発動しない異界移転法を使うことになる。自国の術の方が精度は高くなり、成功率も高くなるからな。——この異界移転法は満月であればいつでも発現することができのだが、やはりアウスのものでいいはないにしても、大きな魔力が必要になる。今の世に己の魔力一つで異界移転法できるものは恐らくいないだろう。」

「え？じゃあなんで迎えに来ることができるんですか？」

「己の魔力一つで来られるほどではないが、ウィルは国でも1・2番の魔力量を競う優秀な魔力使いだ。その上、我に「真名」を捧げておる。ウィルが渡る際と帰る際に我が真名を喚べば、ウィルの魔力量とも合わさって、失敗率は1割にも満たないだろう。それに我が帰る際は、ウィルの魔力量と我の王族として月の女神アストレアの守護で、ほぼ無事に帰れる。この方法が一番リスクを抑えられる。」

異世界とのジェネレーションギャップに、清佳は頭にはてなを浮かべる。

（色々と、「魔力」とか「真名」とか聞きたいことはあるけれど、それはもう明け方も近いし、落ち着いてから、にしよう。うん。）

その表情を読んだのか、またアレクトは苦笑した。

「・・・ともかく、迎えが来られて元の世界に戻る可能性が大変高いと聞いて安心しました。次の満月までの一カ月ほど、どうぞ当家でゆっくりなさってください。」

「ああ。申し訳ないが、よろしく頼む。」

——そして、波瀾の、人生が何もかも変わってしまつような、
そんな予感に満ちた1カ月が始まりを告げた。

現状把握2 A l e c t - s i d e (前書き)

お待ちせいたしました！再開です。

清佳の自信に満ちた言葉に、アレクトの口から思わず皮肉が漏れた。

「・・・ほう。そなた、我の話を全て信じると？その上で『異世界』と結論づけると？」

しかし、清佳はそんなアレクトの態度には頓着せず、何事もないように肯定した。

そして、滔々とその自信の理由を述べ始める。

清佳が話そうとしている話はどうやら門外不出と言えるものであるらしく、同席した川原が困惑したような表情を見せた。

だが、そんな川原を制した清佳の表情は凜としていて、当主としての自覚を滲ませていた。

その表情に、アレクトはわれ知らず惹きつけられ、目を奪われる。

その時。

どくん。

と、灼けるようナニかが右胸を打った。

（胸が、いやこれはあの印が反応した・・・？だが、何に・・・？）

ほんの一瞬、だが確かに起こった己の反応に、アレクトは困惑し、熱くなった右胸に思わず手を当てようとしたところで、はっと我に帰った。

（どんなことがあるうと、今後のことや生命にも関わるような大事な交渉の席で、集中力を欠くなど俺は何をやっているのだ。）

持ちあげかけた手をそつと降ろし、ひそかに拳をきつく握る。爪や指が食い込む痛みが、アレクトを次第に冷静にさせた。

どうやら、アレクトの異変は気付かれなかったらしく、そのことにアレクトは胸を撫で下ろす。

完全に動揺が収まると、詰めていた息を静かに吐き、アレクトは様々な思いを振り払い、清佳の話に集中した。

冷静になった頭で、アレクトは情報をかみ砕く。話によれば、清佳の家は直系の女子にのみに継がれる『異能』によって栄えた家格らしい。

アストレア神国を有する大陸において、衰えつつあるとはいえ魔力を持つ人間がいることはごく一般的に知られていることである。

そのため、アレクトは『異能』と呼ばれる能力に対して、疑念も過信もない。

だが、清佳が言う『異能』と呼ばれる能力が、アレクトの世界の魔力と呼ばれる能力と性質が違うことが、今までの状況と話から推測された。

また、直系の女子のみに継がれるということであれば、清佳はその『異能』を持っていることになる。

そのことについて、清佳に質問を投げかける。

「ほう。それでその『異能』とやらわ、どんな力なのだ。直系の女子のみ、ということはそなたも異能を持っているのであろう？」

「・・・昔は『遠見』——未来を予知する力だったようですが、時代の流れによつて血が薄くなったためか、私の能力は、未来に起こる事象などを一方的に見せられる『託宣』のような力です。わかりやすく私は「勘」と言っていますが。」

「『託宣』か。」

（どうやら、昔はある程度「視たい起こりうるはずの未来」が視えたが、今は完全に自由性は失われている、というところか。）

そこでふと、アレクトは奇妙な符号に気づく。

アストレア神国が立国したのも、史実によれば丁度1、000年前。そして、西園寺家の『異能』と同じく、時代の流れか、はたまた別の理由によるのか、確実に衰え廃れつつある『魔力』。

まさかと笑ってしまうほど根拠も何もないが、現実主義のアレクトにしては珍しくこの2点の符号が何かを意味するような、関係性があるような気がしたのだ。

（ただの偶然。気の迷いだ。）

そう思考するのとは別に、話は進んでいく。

清佳がアレクトを見つけた経緯を聞くころには、アクトレアは清佳が己を庇護する理由も、清佳の人格も信頼できるものであると判断した。

（『託宣』を違えることにより災厄が降りかかるのであれば、俺を庇護するようにという『託宣』に従うことも道理。だが、ここまで厳密に、最大にして絶対と子子孫孫に受け継がれるということは、過去に違えられたことがある可能性が高い。・・・一体どんな災厄があつたのだ？）

そこまでこの場で踏み込んで良いものか、アレクトが躊躇していると、清佳の口から驚きの発言が漏れた。

「ゼストリア国」の「アウス・フォード」。

それは大陸で最も有名と言っても過言ではない存在。

過去1人として上回ったことのない魔力量を保有し、それを制御・使用する類まれな才に恵まれもの。異界を渡る術を編み出した大魔法使い。

そして、今はもうない王家の傍流であり、当時戦乱後の退廃した世に憂い、法の整備に尽力した偉大なる先人。

（だが、なぜここで「アウス・フォード」がでてくるのだ？）

アレクトは、「これを」と清佳に指された書物を読み、更に驚いた。

アウス・フォードには様々な逸話が残されている。

それをアウス亡きあと、弟子が歴史書として編纂した。現在、原書は王宮の禁書庫に保管されている。

異界移転法という真偽がつけられないため、今も昔もアウスの異界移転法は「ペテンである。」という意見が数多くあった。

だが、清佳の家に残された書物が、アウスの異界移転法が真であると証明している。

その現場に立ち会えた偶然に、アレクトは感慨深かった。

そして、「西園寺家でアレクトさんの一切はお任せください。」と結び、清佳が長い話を終える。瞬間、大きく息をついた清佳の様子に、アレクトは自然と感謝の気持ちが高まった。

（当主として異常とも言える状況に慎重に対処し、俺への説明もこなしただ。疲れて当然だろうが、それを見せまいとする気概は尊

敬に値するな。」

「・・・あい、わかった。この国というか世界が『異世界』というのは、清佳殿の話や地図、この室の謎えなどを見るに真実なのだろう。その上で、我をこの家にて庇護するというのも、大変ありがたい。」

そう言つて、アレクトは頭を下げる。

アレクトが頭を下げたことに、清佳と川原が驚いている気配が伝わる。

そのことにこの世界に来て初めて苦笑が漏れる。

（王だからと言って与えられるものの価値がわからないわけではないし、与えられることが当たり前だとも思わないのだがな。）

「王とはいえ、この世界ではそれも意味のないものであろう。ましてや、そなた達は恩人だ。人として頭を下げるべきであらう?。」

その言葉に清佳が更に目を見開き表情を変える様がなぜか楽しく、アレクトは笑み深くした。

清佳の話を総合し、推測した結果、時間の流れがこちらとあちらで同じであること、同じであれば迎えが来る可能性が高いことを告げる。

その理由も併せて話してみると、清佳はいま少し理解できていないような反応があった。

（説明したいところではあるが・・・明日の方が良いだろうな。）

清佳も同じ考えであったのだろう。

再度「一カ月ほど、どうぞ当家でゆっくりなさってください。」と告げると、川原を連れ、客間を辞して行った。

その様子を最後まで見送り、アレクトは寝台にどさりと身体を投げ出した。

清佳との話で嘘は言わなかった。

だが、嘘は言わなかったが、話していないことならある。

（ひと月。ひと月の猶予だ。それまでに、考えること、策を講じなければならぬことがある。・・・だが、いまだけは。）

まとまらない考えのなか、アレクトは己に一時の許しを与えた。

そして。

強烈で甘美な睡魔に抗わず、アレクトは意識を手放した――。

現状把握2 A l e c t - s i d e (後書き)

しばらく書かないうちに、書き方を忘れたみたいで。
とりあえずこのまま投稿し、完結後、順次直していきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8802t/>

月と貴方と願いの行方

2011年10月8日18時40分発行